

令和六年度入学試験問題

国 語 一〇一

(前期日程)

(注意事項)

- 1 問題冊子および解答用紙は、解答開始の指示があるまで開かないこと。
- 2 問題冊子は1冊、解答用紙は4枚と下書き用紙1枚である。
- 3 解答は、解答用紙の指定された解答箇所を書くこと。指定された解答箇所以外に書いたものは採点しない。また、裏面に解答したものも採点しない。
- 4 解答開始後、4枚すべての解答用紙の「受験番号」欄に受験番号をはっきりと記入すること。
- 5 配付した問題冊子および用紙はすべて回収する。

第3問、第4問は選択問題である。いずれか一方を選択して解答せよ。

選択した問題の解答用紙の所定欄に○印を記入せよ。

なお、両方に○印を記入した場合、あるいはいずれにも○印を記入していない場合は、ともに採点対象とする。

国語
問題

第1問 次の文章を読んで、後の設問に答えよ。なお、設問の都合上、原文の一部を改変したところがある。

歴史はすべてを語り尽くすことができず、「語るに値するもの」のみを選び出して叙述する作業であるとすれば、その選択と決断を支えているのは歴史家の「視座」を描いてほかにはない。その視座が膨大な史料のなかから特定の出来事を選び取り、さらにはそれらを適切に配置し叙述するのである。それどころか、史料そのものの存在が偶発性と恣意性を孕むことについて、三瀬利之は次のように述べている。

ある出来事の記憶や事実が、記録者の取捨選択と「書くこと」そのものがもたらす加工と構造化を経て、「文書」として記録されたからといって、それがそのまま歴史家の「史料」となるわけではない。それが「史料」となるには、その「文書」が物理的に残存し、歴史家に入手されなければならない。そして「書くこと」にも選別があるように、「残存すること」「入手すること」にも同様の選別がある。

それゆえ、歴史家の視座が選別を行う以前に、史料の存在それ自体が選別の結果なのである。そこには二重の選別の機制が働いている。加えて、歴史家の視座が時代精神や利害関心によって彩られ、ある種のイデオロギー性を帯びていることは言うまでもない。それゆえにこそ、歴史を記述する主体の立ち位置が問題ともなるのである。

歴史家は、科学者がシャーレのなかから任意の検体をピンセットで摘み上げるように、歴史的出来事を史料のなかから無作為にサンプリングするわけではない。その選択には、いわば歴史家の学問的実存が賭けられているのである。当然ながら、特定の「視座」によって開かれる歴史の時空は等方向等質ではなく、関心の遠近法に沿った歪みを伴わざるをえない。それは、想起された時空がパースペクティブ性を持ち、ある場面は鮮明にクローズアップされ、関係のない事象は薄明のなかに溶け去っていると同様である。記述によって現前する歴史的空間は非ユークリッド的であり、歴史的時間を支配しているのは連続的な時間で

はなく、好機だと言うこともできる。ここで好機とは、W・ベンヤミンが述べた、次のような瞬間のことである。

過ぎ去った事柄を歴史的なものとして明確に言表するとは、それを（実際にあつた通りに）認識することではなく、危機の瞬間にひらめくような想起を捉えることを謂う。歴史的唯物論にとっては、危機の瞬間において歴史的主体に思いがけず立ち現れてくる、そのような過去のイメージを確保することこそが重要なのだ。

しかし、危機の瞬間にひらめいた過去のイメージは、持続しない。ベンヤミンが述べているように、「過去の真のイメージはさつと掠め過ぎてゆく。過去は、それが認識可能となる刹那に一瞬ひらめきもう二度と立ち現れはしない」のである。好機が「過去から未来に向かつて飴の様に延びた」連続的時間ではなく、好機として立ち現れる離散的時間である以上、それは当然のことであろう。それゆえにこそ、歴史家はその瞬間を記憶にとどめ、他の出来事と結び合わせて形象化するために「物語り」を紡ぎ出すのである。

だが、「物語り」が一定の視座からする言語行為である以上、そこには忘却や抑圧や隠蔽が生じざるをえず、「物語り」から排除された出来事たちが沈黙の叫び声をあげ、異議申し立てを行うことになるであろう。それを歴史の「外部」と呼ぶこともできる。歴史の外部の声に耳を傾け、それを顕在化するために必要なことは、何よりも「視座の転換」である。そのような視座の転換の目覚しい例に、二〇世紀後半の歴史学は立ち会うことになった。すなわち「オリエンタリズム」と「ジェンダー」である。

オリエンタリズムとは、西洋（オクシデント）の東洋（オリエント）に対する思考および表象の様式のことであり、同時にそれが西洋の東洋に対する政治的・文化的支配の様式であったことを明らかにする概念である。それを提起したE・サイード自身は「オリエンタリズムのなかに現れるオリエントは、西洋の学問、西洋人の意識、さらに時代が下つてからは西洋の帝国支配領域、これらのなかにオリエントを引きずり込んだ一連の力の組み合わせの総体によって粹付けられた表象の体系なのである」と

それを敷衍^{ふえん}している。つまり、西洋と東洋のあいだに引かれた境界線は「自然界の事実」というよりは人為的な事実」なのである。それをサイドは「心象地理」とも呼んでいる。

このようなサイドの問題提起は、いわば両義図形を見るように、歴史を見る眼差しを反転させた。それによって、これまで抑圧され隠蔽され、一定のパターンを押し付けられてきたオリエントのイメージが一新されるとともに、そこに纏^{まと}わりついてきた政治的・文化的支配の力学が白日の下に晒^{さら}されたのである。

男性と女性という自明の区別もまた「自然界の事実」というよりは人為的な事実」であることを浮き彫りにしたのは「ジェンダー」という概念であった。ジェンダーはもともと文法上の性別を表す言語学用語であったが、一九七〇年代の第二波フェミニズム運動のなかで、生物学的性差を表す「セックス」に対して、社会的・文化的に形作られた性差を表現する概念として用いられ始めた。ジェンダー概念を歴史学のなかに導入したジョーン・スコットによれば、^{〔注6〕}「ジェンダーとは、生物学的な性をもった身体のうち押しつけられた社会的カテゴリー」にほかならず、「肉体的差異に意味を付与する知」なのである。ジェンダー概念が要求しているのは、男性／女性のような自明の二項対立のなかに潜んでいる抑圧的要素を暴きだし、既存のカテゴリーの安定性を揺さぶることだ、ということであろう。

「オリエンタリズム」や「ジェンダー」の概念によってもたらされた視座の転換は、これまでの歴史記述において忘却され隠蔽されてきたマイノリティの声を発掘し、顕在化させることになった。そして、当然のことながら視座の転換は歴史の書き換えを要求せずにはおかない。それゆえ、歴史記述とは支配的物語りに対する絶えざる「修正」の運動だと言ってよい。それは他面において、歴史が未来の再審へ向かってつねに開かれていることの証左でもあるのである。

すでに述べたように、歴史家は「語るに値すること」の選別を行う。したがって、「書かれたこと」の背後には、選別に漏れ「書かれなかった」無名の死者たちの行為と事跡とが山をなしてひしめいている。むしろ、彼／彼女らが存在しなかったわけではない。その痕跡は今に残っている。大橋良介の言葉を借りれば、^{〔注7〕}「たとえ死者が無名のままに忘れられても、彼らは、現在世界の足下に沈殿する過去世界を——ふつうの言葉で言えば「伝統」を——形成した者として、無名のままに現在のである」からであ

る。だとすれば、その痕跡を掘り起こして「物語る」ことは歴史家の責務と言うべきものであろう。つまり、歴史的事実の選別が現在の関心に基づいて行われることは当然としても、その選別の正当性（「不当な行為」であるか否か）は死者の眼差しによって裏打ちされなければならないのである。

これを、逆の意味での「世代間倫理」と呼ぶこともできる。通常の世代間倫理は、未来世代への責任の観点から論じられるものだからである。むしろ、死者の声は史料を通じて「解釈」を施さなければ聞こえてはこない。そこに響いているのは、多様な「解釈」を生み出す重層的な声である。そこから理解可能性と受容可能性をもったいかなる「物語り」を紡ぎ出すかは歴史家の技量と判断にゆだねられている。もしそこに何らかの統制的理念が働いているとすれば、それは無名の死者たちを正当に遇するという過去へ向かつての「世代間倫理」なのである。

それと同時に、歴史記述は現在世代および未来世代へ向かつての「記憶せよ！」という呼びかけの言語行為でもある。記憶に値するものを選び出し、物語るという行為は、それゆえ死者の眼差しとともに現在および未来の「他者の眼差し」にも裏打ちされているなければならない。そこには本来の意味での「世代間倫理」が存在する。それゆえ、歴史記述に倫理を語る余地があるとすれば、それは過去と未来の双方向へ向かう「世代間倫理」という場所を描いてほかにはない。歴史とは「現在と過去との間の尽きぬことを知らぬ対話」という^{〔注8〕}E・H・カーの有名な定義を借りるならば、^{〔注9〕}歴史を書くという行為は、生者と死者のあいだの、そして未生の者たちとのあいだの尽きぬことを知らぬ対話なのである。

（野家啓一『歴史を書くという行為』による）

〔注〕 1 三瀬利之——日本の歴史学者。一九六九年。

2 パースペクティブ性——ここでは、歴史全体を略図のようにとらえることをいう。

3 非ユークリッド的——ここでは、論理的思考の方法に則り体系立てて記述されていないことをいう。

4 W・ベンヤミン——ドイツの文芸批評家、哲学者。一八九二年～一九四〇年。

5 E・サイード——アメリカの文学研究者、文芸批評家。一九三五年～二〇〇三年。

6 ジョーン・スコット——アメリカの歴史学者。一九四一年。

7 大橋良介——日本の哲学者。一九四四年。

8 E・H・カー——イギリスの歴史家、国際政治学者。一八九二年～一九八二年。

問1 傍線部(A)「歴史家の視座が選別を行う以前に、史料の存在それ自体が選別の結果なのである。そこには二重の選別の機制が働いている」について、以下の問いに答えよ。

(1) 「歴史家の視座が選別を行う」とはどのようなことか、本文の内容に即して説明せよ。

(2) 「二重の選別の機制が働いている」とはどのようなことか、本文の内容に即して説明せよ。

問2 傍線部(B)「視座の転換の目覚しい例」に関して、以下の問いに答えよ。

(1) サイドによる「視座の転換」の前後において、西洋と東洋の区別に対する見方はどのように変わったか、まとめよ。

(2) スコットによる「視座の転換」は、その後の歴史記述に対してどのような影響を与えたか、まとめよ。

問3 傍線部(C)「歴史を書くという行為は、生者と死者のあいだの、そして未生の者たちとのあいだの尽きることを知らぬ対話なのである」とはどのようなことか、本文の内容に即して説明せよ。

第2問 次の文章を読んで、後の設問に答えよ。なお、設問の都合上、原文の一部を改変したところがある。

世界の宗教建築には垂直の線を強調し、天高くそびえるものがある。高く築いた石造ピラミッドの上に神殿を置くこともあり、寺院そのものが高層の石造建築でその外壁を無数の浮彫り像で埋めることもある。イスラームのモスクには細い高い塔が何本か付属していて、その上から信徒に向って礼拝の時を知らせる。一二世紀以後ゴシック様式のヨーロッパの大聖堂は、正面入口の両側に高い鐘樓を備えることが多く、内部も列柱から尖塔アーチの天井へ向ってあらゆる線が上昇し天を指すように作られている。北ヨーロッパの村の教会は、石造・木造・煉瓦造りで、鐘樓は低いが、屋根の中央の尖塔が天を指す。たとえば今もなおイングランドの田園風景は、^{〔注1〕}コンスタブルが描いたように、ゆるやかに起伏する丘の間の牧場と、牛の群れと、小川、そして地平線の森と、その上の空に突き出た小教区の教会の尖塔から成る。^{〔注2〕}イル・ドゥ・フランスの風に波打つ麦畑と高く空へ向って伸びたポプラの並木の彼方にも、遠い森のかげに教会の尖塔は見えるだろう。しかし日本の田園では見えない。そこには高いポプラ並木のように、教会の鋭い尖塔のように、^①断乎として明瞭な、ダキョウの余地のない垂直線がない。

日本では宗教的建築でさえも、平屋または二階建てで、地表に沿って広がって、天へ向って伸びてゆくことはない。神社には塔がない。一部の神々はたしかに「高天原」から降ってきたとされるが、「高天原」は天上よりも山頂にあつたらしい。降つて来てしかるべき仕事をしたのち天に昇つたという話も『古事記』にはない。しばらく地上に在つてのち天へ帰つたのは、八百万の神々ではなくて、かぐや姫や羽衣をとりのどした天女や民話のなかの鶴である。神社が敢えて天上に関わらなければならぬ理由は弱いだらう。例外は^{〔A〕}仏教寺院の五重塔である。しかし第一に、仏教は外来宗教であり、五重塔は外来宗教の造形的表現の一つである仏塔の「日本化」である。第二に、中国には大雁塔のように高い仏塔もあるが、日本では層を五重または三重に限り、

幅の広い^{〔B〕}廂をほとんど水平に四方に出して、垂直の線を隠した。日本化とは塔の非塔化である。多数作られた五重塔は、日本建築にも高さへの志向があつたということを示言するのではなく、日本では宗教建築においてさえも天を指して上昇する傾向はなかつた、あるいはきわめて弱かつたということ、建築的空間を水平面に沿って構成する傾向こそがきわめて強かつた、ということを示言するのである。

宗教的建築において然り、いわんや世俗的建築においてをや。住宅は天皇の離宮から大名屋敷まで、都会の豪商の邸宅から小作農の農家まで、どこでも、ほとんど常に、平屋または二階建てであつた。数階に及ぶ大きな建物が現れるのは、明治以後西洋の技術が導入されてからである。たとえば二〇世紀初の「丸ビル」は八階のコンクリート建築であつた。しかしその形が横からの強調に変わったのではない。タテの線を強調する高層建築が現れたのは、第二次大戦後である。しかし伝統的木造の非宗教的な建築にも例外がなかつたわけではない。それは主として徳川時代初期に、大名がその居城に築いた天守閣であり、所領地の住民を^{〔C〕}アイツすることが主な目的であつたらう。

住居の原型は、一室の家である。住む人にとってそれ以上の空間が必要になれば、同じ敷地内に、あるいは近隣に、もう一軒の一室家屋を建てる。第二の室を別棟としないで第一の室へ、^③ロウカでつなぐか壁を接して作れば、一軒の家屋の「建増し」である。建増しは原則としていつまでも続けることができる。それには時とともに変る必要に対応できる利点があると同時に、かくして出来上つた数室から成る建物の全体の形を初めから予想はできない欠点がある。他方、初めに長期間の必要を予想して、仕事を一室からではなく全体の大きさと形を決めることから始めることもできる。まず枠組を作り、その中の空間を分割して必要な、あるいは将来必要になるだろう、と予測されるいくつかの室を作る。全体の調和を実現できるのはこの方式の利点であ

り、予測外の空間の必要がおこったときに対応が容易でないのは欠点である。要するに第一の建増し方式は、部分から出発して全体に到り、第二の、今から計画方式とよぶやり方は、全体から出発して部分に到る。

一般に宮殿や大寺院や死者の廟(びやう)のような記念碑的建物は計画方式(B)により、大部分の住宅や商店や工場は多かれ少なかれ建増し方式の要素を含むことが多い。いつの時代、どの文化のなかでも、二つの方式は混在している。しかしいずれの方式を重視し、強調するかという点に関しては、文化による違いが著しい。北京の紫禁城の中心部分(注3)は全く計画的に左右相称の枠のなかに収められている。中国全土ではないが北京では、伝統的な住宅でさえも計画的に左右相称で、建増しの余地を残さない。フランスではヴェルサイユ宮が庭園を含めて全く計画的であり、ゴシックの大聖堂も全く同じ方式によるが、農家はしばしば建増し方式による。イスタンブールのトプカピ宮殿(注5)は、広い敷地のなかにあまり大きくない建物を点在させる一種の建増し「複合体」で、その全体にはあきらかに計画性がない。それぞれの建物の大きさや建物群の配置の全体には強い関心がなく、建物内側の細部に注意を集中しているという点で、トプカピは紫禁城やヴェルサイユと対照的である。日本では大寺院に計画性がないわけではない。しかし寺院建築には中国からの影響が強い。中国のハンレイ(注4)を離れた宮殿、たとえば桂離宮(注6)では、日本の建築家の感受性は建増し方式をとり、トプカピを作ったトルコ人の感受性に近づき、それをさらに研ぎすます。そこには建増し方式に習熟した後、その実用的な利点を遂に美的利点にまで高めた工夫がある。世界中から集めたトプカピの宝石はもはやそこにはなく、その代りに幾何学的空間の絶妙の調和がある。

しかし建増し方式は個別の建物よりも集落や町の構造に反映している。京都の原型長安の大都には、都市計画の整然たる秩序があつた。都市の計画的建設は、欧米でも、近代になってから盛んになった。たとえば一八世紀末に設計されたワシントンD.

C. やオースマン男爵のパリは放射線状の構造をもち、ニューヨークのマンハッタンは碁盤目状に整理されている。しかし多くの都会は昔も今も自然発生的に成立し、全体をおおう計画に従って発展したものではない。その時々が必要に応じて次々に新しい建物をつけ加えて来た建増し型都市である。殊に日本の場合には京都を唯一の例外として、すべての町が成り行き任せの建増し型であつた、といえるだろう。もちろん町の一部について、小區画内の計画はあり、防災を目的とする區画整理はある。しかしそれらは複雑な町の機能を包みこんでの総合的な計画ではない。東京は一九二三年の大地震と四五年の焼夷弾爆撃(しょういだん)で二度焦土と化した。そして焦土から不死鳥のように、建増し過程を通して、巨大な「カオス」として甦(よみがえ)つた。

家屋の、都会の、建増しの思想を、もつともよく象徴しているのは、首都の地下鉄工事かもしれない。フランス人は一九世紀末にパリの全旧市街をおおう地下鉄網を一挙に作った。計画は周到で、一〇〇年以上経った今でも、旧市街の交通に関するかぎり、ただ一本の新しい路線をつけ加える必要もない。われわれ日本人は戦前に一本を通し、戦後は五年に一本ずつ新しい路線を建増して、今では東京の大部分のところへ地下鉄で行くことができるが、もつと路線があればもつと便利だろう(あるいはもつと金もうけができるだろう)ということ、地下鉄工事は今もつづいている。建増しは原則として無限につづき得るのである。鷗外は、昔『普請中』(注8)という有名な短編小説を書いて日本社会の「近代化」を批判したとき、普請はカトキ(注9)のことでいつかは終るだろうと考えていたのかもしれない。しかし普請は実は建増しであつて、東京の地下鉄工事のようにいつまでつづくかわからない。建増しの思想は日本文化の深いところまで染みこんでいる。

建増し主義からは伝統的空間意識の二つの特徴を予想することができる。すなわち「小さな空間」の嗜好と、左右(上下)相称性(シンメトリー)の忌避である。後者は「非相称性」の好みと言い換えることもできる。建増し主義の背景には、全体から

細部へではなく、細部から全体へ向う思考の傾きがある。その傾きは、当然、細部すなわち「小さな空間」に注意を集中する心理的傾向を生みださだろう。「小さな空間」が独立すれば、たとえば楽茶碗（注）の「景色」が洗練され、根付の彫りにおどろくべき工夫が凝らされることになる。他方「シンメトリー」は対象の全体の設計に関わる。一本の軸、または一つの平面の両側に重ね合わせることでできるような同じ大きさの同じ形を配するのが「シンメトリー」であり、建増しの結果として相称的な建物が成り立つことはない。日本文化の中の空間の特徴は、単に「シンメトリー」の不在ではなく、故意に、意識的に、ほとんど計画的に「シンメトリー」を避ける傾向である。たとえば桂離宮の建物の入口へ導く敷石の配置は、目的合理性のある一定幅の直線の左右相称性を避けて、不規則である。

（加藤周一『日本文化における時間と空間』による）

〔注〕 1 コンスタブル——一九世紀イギリスを代表する風景画家。一七七六年〜一八三七年。

2 イル・ドゥ・フランス——フランスのパリ盆地中央部の地方。

3 紫禁城——一五世紀初め、中国の明の永楽帝が北京遷都に際し建造した宮城。

4 ヴェルサイユ宮——一七世紀にフランスの王ルイ一四世が建造した宮殿。

5 トプカピ宮殿——一五世紀中頃から一九世紀中頃までオスマン帝国の君主が居住した宮殿。宝石をあしらった豪華な宝飾品が多かった。

6 桂離宮——一七世紀に八条宮家の別邸として建造されたもの。建築群と庭園からなる。

7 オースマン男爵——一九世紀フランスの政治家、パリ市街の改造計画を推進した。一八〇九年〜一八九一年。

8 『普請中』——森鷗外（一八六二年〜一九二二年）が一九一〇年に発表した小説。「普請」とは家を建築したり修理したりすること。

9 楽茶碗の「景色」——楽茶碗は千利休の創意を受けて楽長次郎（注）が始めた楽焼の手法によって作られたもの。「景色」とは茶碗の外側をめぐるうわ葉の発色で向きによって異なる複雑な姿をいう。

問1 傍線部①〜⑤のカタカナを漢字に直せ。

問2 傍線部(A)「仏教寺院の五重塔」とあるが、日本の宗教的建築における五重塔の位置づけを本文の内容に即して具体的に説明せよ。

問3 傍線部(B)「計画方式」と傍線部(C)「建増し方式」に関して、以下の問いに答えよ。

(1) 「計画方式」とはどのようなものか、本文の内容に即して説明せよ。

(2) 「建増し方式」にはどのような意識が反映されているか、「計画方式」にあらわれている意識との違いがわかるように説明せよ。

(3) 「建増し方式」の思想とはどのようなものか、建築以外で象徴的にあらわれているものを本文中から挙げながら、具体的に説明せよ。

第3問、第4問についてはいずれか一方を選択して解答せよ。

第3問 (選択)

次の文章は、歌論書『俊頼髓脳』の一節で、冒頭の有間皇子(六四〇〜六五八年)作の歌にまつわる話が展開されている。これを読んで、後の設問に答えよ。

岩代〔注1〕の浜松〔注2〕が枝えをひきむすびまさしくあらば〔注3〕またかへり見む〔注4〕

これは、孝徳天皇と申しける帝みかど、位をさり給はむとしける時、有間の皇子むつじに位をゆづり給ふべきを、え保つまじきけしきを御覧じてゆづり給はざりければ、うらみ申して、山野にゆきまどひ給ひて岩代といへる所にいたりて、松の枝を結びて、詠み給へる歌なり。

家〔注4〕にあれば〔注5〕筥けにもる飯いひを草枕旅くさまくらにしあれば〔注6〕椎しひの葉にもる

これも、その程に詠み給へり。

結び松の心は、手向けたむといへる同じ事なり。松の葉を結びて、これが解けざらむさきにかへりこむと、ちかひて結ぶなり。さて、「まさしくあらば」と詠むなり。

しらなみの浜松が枝の手向け〔注6〕ぐさ〔注7〕いくよまでにか年のへぬらむ

松を結びて、時にしたがひて花をも紅葉をものりて手向くるなり。手向けぐさといふは、これらを申すなり。

有間の皇子かくのごとくまどひありき給ふやうを聞きて、世の人あはれがり申しけり。

大宝元年に、文武天皇と申すみかど紀の国に幸し給ひてあそはせ給ひける御供に、人麻呂が侍りて、かの皇子の結び給へる松を見て詠める歌、

のち見むと君がむすべる岩代の小松がうれをまた見けむかも〔注8〕

同じたび、よし丸が詠める歌、

岩代の崖きしの小松をむすびたる人はかへりてまた見けむかも

このごろの人は、岩代といふ所のあるとは知らで、亡せたる人の塚なり、むすび松といへるはしるしに植ゑたる木なり、されば、祝ひの所にては詠むまじきよしをいへる。ひが事にや。

(源俊頼『俊頼髓脳』による。一部改変)

〔注〕 1 岩代 紀の国中部にある浜辺あたりの地名。

2 浜松が枝を…… 当時、松の小枝を結んで無事などを祈る習俗があつた。

3 まさしく 祈つたとおりに無事で。

4 筥 食べ物盛る器。

5 手向け 神仏に捧げ物を供えること。ここでは、捧げ物を供えて無事を祈ることという意味でも含んである。下二段活用動詞「手向く」の連用形が名詞化したもの。

6 しらなみの…… 紀の国で川島皇子(六五七〜六九一年)が詠んだとされる歌。

7 大宝元年 七〇一年。

8 うれ 枝の先。

9 よし丸 人名。長忌寸意吉鷹を指す。

問 1 破線部①②③を、「ば」の用法に注意しながら、簡潔に現代語訳せよ。

問 2 傍線部①②③をわかりやすく現代語訳せよ。

問 3 有間皇子が歌を詠むまでの経緯を本文に即して具体的に説明せよ。

問 4 人麻呂とよし丸の歌に共通して詠み込まれている内容を具体的に説明せよ。

問 5 二重線部「このごろの人」がもつ認識と、その認識に対する筆者の考えを説明せよ。

第3問、第4問についてはいずれか一方を選択して解答せよ。

第4問 (選択)

以下の旅行記を読んで後の設問に答えよ。なお、出題の都合上、原文を省略・改変したところや、返り点と送り仮名を省略したところがある。

明治戊子之夏、余^(注1)発^(注2)徳島^(注3)、到^(注3)撫養港^(注3)。先^(注4)訪^(注4)秦立上人^(注4)。以^(注5)有^(注5)先容^(注5)也。即^(注6)告^(注6)遊^(注6)鳴門^(注6)、問^(注6)道^(注6)所^(注6)由^(注6)。上人^(注6) X 其弟子二人及比隣某^(注7)導^(注7)。寺門前^(注8)有^(注8)大渠^(注8)、所^(注8)控^(注8)潮水^(注8)也。乃^(注9)僦^(注9)舟^(注9)以^(注9)渡^(注9)一里許^(注10)水窮^(注10)。捨^(注10)舟^(注10)上^(注10)一小山^(注10)。数^(注10)百步^(注10)復^(注10)下^(注10)山^(注10)即^(注10)海畔^(注10)也。

〔B〕 白沙漠漠、水天一碧、狂汐噬^(注11)岸^(注11)、勢如^(注11)奔馬^(注11)。又^(注11)左行^(注11)数^(注11)百步^(注11)上^(注11)大毛山^(注11)。蔭^(注11)松坐^(注11)草^(注11)。開^(注12)榼^(注12)倒^(注12)瓢^(注12)、以^(注12)縱^(注12)眺望^(注12)。水渦之所^(注13)盤回^(注13)、為^(注13)世^(注13)所^(注13)謂^(注13)鳴門之奇險^(注13)是也。

少焉^(注14)小舟来^(注14)繫^(注14)渦上^(注14)、不^(注14)能^(注14)進^(注14)。随^(注14)渦旋^(注14)轉^(注14)数^(注14)次^(注14)。如^(注14)不^(注14)知^(注14)所^(注14)向^(注14)者^(注14)。皆^(注14)大息^(注14)曰、「危^(注14)矣^(注14)、危^(注14)矣^(注14)。一^(注14)誤^(注14)楫^(注14)被^(注14)葬^(注14)魚腹^(注14)」。言^(注14)未^(注14)畢^(注14)、舟^(注14)乘^(注14)潮退^(注14)得^(注14)漸^(注14)過^(注14)。 X 人^(注14)余^(注14)悸^(注14)尚^(注14)不^(注14)已^(注14)。

余^(注15)顧^(注15)三子^(注15)曰、「嗚呼、人之^(注15)処^(注15)世^(注15)、猶^(注15)鳴門之舟^(注15)乎。投^(注15)機^(注15)酬^(注15)變^(注15)之際^(注15)、一^(注15)失^(注15)策^(注15)覆^(注15)敗^(注15)不^(注15)救^(注15)。然^(注15)而^(注15)一^(注15)沈^(注15)一^(注15)浮^(注15)、人生之所^(注15)常^(注15)有^(注15)。舟之有^(注15)鳴門^(注15)一^(注15)沈^(注15)、不^(注15)可^(注15)復^(注15)浮^(注15)。誠^(注15)可^(注15)畏^(注15)也。人事之有^(注15)鳴門^(注15)沈^(注15)、猶^(注15)有^(注15)浮^(注15)、豈^(注15)可^(注15)必^(注15)畏^(注15)乎。一旦^(注15)失^(注15)志^(注15)者、勿^(注15)徒^(注15)屈^(注15)鬱^(注15)悲^(注15)嘆^(注15)。鑑^(注15)鳴門之舟^(注15)。皆^(注15)曰、「善^(注15)」。共^(注15)尽^(注15)醉^(注15)。歸^(注15)宿^(注15)光徳寺^(注15)、灯^(注15)下^(注15)記^(注15)之^(注15)。

(井上一鷗「遊鳴門記」による)

〔注〕

- 1 明治戊子——明治二十一年（一八八八）年。
- 2 発徳島——「徳島」は、ここでは現在の徳島城一帯を指す。語り手はここから舟に乗ったと思われる。
- 3 撫養港——現在の徳島県鳴門市の北東部に位置する港湾。「徳島」の北方に、後述の「鳴門」（鳴門海峡）の南方に位置している。
- 4 秦立上人——「上人」は僧侶。「秦立」については不詳。
- 5 先容——予約。
- 6 鳴門——ここでは鳴門海峡を指す。鳴門海峡とは、現在の兵庫県淡路島と徳島県鳴門市との間の海峡を指す。古来、渦潮で有名。
- 7 比隣——隣近所の者。
- 8 大渠——広い水路。
- 9 僦舟——金を出して舟と船頭を借りること。
- 10 一里——約四キロメートル。
- 11 大毛山——鳴門海峡に面した山の名。
- 12 開榼倒瓢——「榼」は酒樽。この句は宴会を始めたことを言う。
- 13 奇険——珍しく険しい景観。
- 14 余悸——収まらない動悸。
- 15 屈鬱——元気をなくすこと。
- 16 光徳寺——現在の徳島県徳島市不動東町に位置する寺院。

問 1 傍線部①②に返り点を打ち（振り仮名や送り仮名はつけなくてよい）、書き下せ。書き下し文では現代仮名遣いを用いること。

問 2 波線部(A)「告遊鳴門、問道所由」を書き下し、現代語訳せよ。書き下し文では現代仮名遣いを用い、現代語訳ではこの一節の主語と動作の受け手も明示すること。

問 3 波線部(B)「白沙漠漠、水天一碧、狂汐嘯岸、勢如奔馬」とあるが、どのような風景のことか説明せよ。

問 4 本文に二か所ある空欄部 X に共通して入る語を書け。送り仮名を平仮名で補うこと。

問 5 破線部「鑑鳴門之舟」とあるが、語り手は大毛山に登って目撃した光景からどのような教訓を導き出したか、わかりやすく説明せよ。

国語 一〇一 (解答用紙 その1)

第1問

問 1			
(2)		(1)	

問 2			
(2)		(1)	

問 3			

小 計

受 験 番 号

国語一〇一（解答用紙 その2）

第2問

問1
①
②
③
④
⑤

問2				

問3								
③			②			①		

小計

受験番号

国語 一〇一 (解答用紙 その3)

第3問を選択する者は下の空欄に○印を記入せよ。

第3問 (選択)

問 1	
③	①
②	④
⑤	⑥

問 2		
③	②	①
④	⑤	⑥
⑦	⑧	⑨

問 3		
④	⑤	⑥
⑦	⑧	⑨
⑩	⑪	⑫

問 4		
④	⑤	⑥
⑦	⑧	⑨
⑩	⑪	⑫

問 5			
④	⑤	⑥	⑦
⑧	⑨	⑩	⑪
⑫	⑬	⑭	⑮

小 計

受 験 番 号

第4問を選択する者は下の空欄に○印を記入せよ。

第4問 (選択)

問1	
②	①
書き下し文	書き下し文
返り点 被 葬 魚 腹	返り点 捨 舟 上 一 小 山

問2	
現代語訳	書き下し文

問3		

問4

問5				

小 計

受験番号